

ひまわりからの メッセージ

173号

2026. 5. 11.

NPOひまわりの花内
西濃圏域

発達障がい支援センター

発行人：中野たみ子

五月の風に揺れる

マーガレットの花に寄せて



皆さんはゴールデンウィークをどの様に過ごされましたか。家族旅行をされた方もあるでしょうし、子ども達につき合って買物に出かけたという方もあるでしょう。しかし、連休明けには、五月病になる方が多いようです。朝体が重くて起きられない、何となくだるいなど、それぞれ理由で不調になるのですが、ストレスが原因だと考えられている様です。しかし「四月に一生懸命にはりきり過ぎて、ふっと連休で気分がゆるんだために、燃え尽き症候群のようになるのが五月病だ」と書かれていたのを何かで読んだことがあって、なるほど「新年度のはじめは誰もが頑張りすぎると言えるなあ」と妙に納得したことを覚えています。

さて、わが家は……と言うと、孫が帰省してきて一日だけ寄りくれました。私には孫が四人いて、上の二人は家を離れています。一番上は東京で就職していて、二番目は大学生です。その大学生は小さい時から野球が好きで、野球のことは頭にないようなのですが、何を思ったのか三ヶ月程アメリカに野球留学へんじすると言うのです。英語も話せないし、不注意もある子なのですが、本人は何とかなるかと周りの心配も意に介さない様子です。母親として娘の心配は相当なものでしょうが、もう、ここは見守るしかないでしょう。そして祖母の私も……。

親子の関係というのは、年齢と共に変わっていきます。赤ちゃん時代の全面的受容から始まり、子どもの自己主張の時には、要求を聞き入れてあげられることと、聞き入れてあげられないことがあることを示していかなければなりません。そして相方で約束したことは、親として決して譲らないという場面も必要だったことでしょう。思春期を終えて、一人の人間としてアイデンティティを確立していく時、親は見守っていくしかないでしょう。困っている時には助けるが、自分でやろうとしている時には手出しをせず、不安であっても見守るといことが出来るかどうか、親としての正念場かもしれません。庭先で風に揺れるマーガレットの花を見ながら、遠い日に庭一面マーガレットにしたいと思ったことを思い出していました。

Dyslexia 読みの困難

ディスレクシアということばに関しては、私たちもよく聞くようになったと思います。日本語では、「読み障害」と訳されます。原因は、文字を見て音を想起することが遅かったり、まちがったりすることにあると考えられています。(流ちょう性、正確性)今回は、日本LD学会が出している「LD研究」の中の石坂郁代さんの講演内容の中から、ディスレクシアについて書いてみようと思います。

読みの苦手さは、ディスレクシアと言いますが、用語の「Dys」は「難しい」、「Dyslexia」は「読む」という意味ですが、「一才、書く」ことの困難さは、「Disグラフィア」と言います。「graphia」は「書く」ということなので、「Dys」をつけて文字を書くことが難しいということになります。

私たちは、LD(学習障害)を語る時に、「読み書き」と一言で言ってしまうのですが、石坂さんは、読むことと書くことを分けて考えることが子どもたちの苦手さを理解する上で重要な一歩であると記している。ただ、単独で読みに困るといふより、書くことの困難さも併存していることが多く、読み書き障害の子は、文科省の二〇二〇年の調査で

は、三、五パーセントいるとなっています。(一クラスに一、二名)読みの困難さは、文字という記号を音に変換することの困難ですが、それは小学生になって突然起きるわけではなく、すでに幼児期から見られるということを石坂さんは記しています。一般的に子どもは二歳すぎになると自然に本や文字に興味を持ち始め、四歳頃には本を読むことに関心が出てくると考えられています。

この幼児期の音韻の発達をチェックする五つの項目があけてありましたので、書いておきます。

- ① 歌の歌詞を覚えることに苦勞する。
- ② 一音で一歩進むフリコのような遊びができない。
- ③ 単語の発音を正確に言えないことがある。
幼児語や音の置換でなく、例えば「エレベーター」を「エベレーター」と言うなど音の順番の変化や音の数の増減などがみられる。
- ④ 文字を読むことに関心がない。
絵本の絵ばかり見ている。何と書いてあるのか聞かない。
- ⑤ 文字や文字らしきものを書きたがらない。書くことに関心をもたない。

この五つの項目のうち一つでも「常に」「あるいは」「しばしば」「当てはまる場合」読み書き障害との一致率は八三、七パーセントだった



とのことでした。

この項目の①と②は、音の記憶や、ことばの一音一音に対する音韻意識の発達という観点からみた項目であり、③は、心の中の立音の操作の苦手を表していると考えられるのです。④⑤は音韻以外の観察項目として入っています。

石坂さんは講演内容の中で幼児の音韻の発達について次のようにも述べています。

「音韻の発達の中でも特に音韻意識の苦手さは、読みの苦手さを引きおこす最大の原因である。音韻意識は、子どものことば遊びの中で発達していく。「くるま」を「くるま」と三つの音に分解したり、「くるま」の最初の音が「く」と言えたりするような単語の音の抽出が四歳後半で可能となる。五歳前半では、ヤカヤことは遊びで、二音の単語の逆唱が可能となり、六歳前半で三音の単語の逆唱ができるようになる。子どもたちは、一つの音に対するこのような認識力、つまり音韻意識を遊びの中で培い、一音と、ひらがな一文字の連合記憶の土台とするのである。しかし、読みの苦手な子どもたちは、このような遊びをほとんどしないことが知られている。」

そして、「幼児期のひらがな七十一文字の識字率について、年

長見で六四、九文字という調査報告があり、五歳後半ではひらがなのほとんどの文字が読める」としている。

この文章を読んで、私は、子どもたちの発語のことを考えていました。話しことは「聞く」ということが前提にありますが、今の子どもたちは、早くからスマホを与えられていて、視覚情報は早くから入ってくるでしょうが、ことは聞くということに関しては少ないように思います。本来、始語として有意味語を話せる年齢は一歳半であったはずの定型発達が、今はずっと遅くなっています。では、絵本はどうでしょうか。家庭で子どもに本の読み聞かせをする割合はどの位なのでしょうか。石坂さんは二歳で本や文字に興味をもち始めると言いますが、今の子どもたちは、どうなのでしょう。ふと不安がよぎりました。

さて、読みの困難さは、どうしたら見つけられるのでしょうか。書くことの困難さは、小学校の先生方はすぐに見つけられるでしょうが、そんな時、書くことの困難さのある子は「読む方は大丈夫かな？」と観察することが大事だと言われます。そして、初見の文章を読む時につかえたり、読みまちがえたり、漢字が読めなかったりすること、気づけます。つまり、読みの困りをもつのは、文字を音に変換することの弱さからおきるのです。行をとばして読むことは違って、目で見る力

が弱いわけではないのです。読むことの苦手さは、知的能力が平均以上であっても起こり得るし、通常学級の子どもの達の中には、真のディスレクシアの他に読みの苦手さをもつ子もたくさんいますから、「読めないリディスレクシアがある」と決めつけるのではなく、「一人ひとりをよく見極めていくことが必要になります」。

読み書きの苦手な生徒がいると、どうしても知的能力の問題としてとらえがちになるため、的確にアセスメントをするということが大切であると言えます。アセスメントとしての主な観点は

- ① 音読の検査 「特異的発達障害診断治療の実践ガイドライン」の検査 (診断と治療社)
「改訂版 標準読み書きスクリーニング検査」 (インテルナ出版)

- ② 漢字熟語の読みの到達度
 - ③ 読解力を見る
 - ④ 自動化能力 (心の中かウキとはを引キ出すカ)
 - ⑤ 音韻意識
 - ⑥ 視知覚認知・記憶
 - ⑦ 知的能力や言語発達能力
- 読みの指導・支援は、おおむね低学年では、文字・音変換の力の向上と語いの増加、中学年では漢字単語の読

6月の予定

- 8日 センター親の会
- 9日 ピアサポート
- ・ 輪之内町巡回 (1日、2日午前、4日午後)
- ・ 安八町巡回 (10日、12日、15日、17日、19日、25日、26日、24日午前)
- ・ 垂井町巡回 (10日、16日、17日、18日、19日、23日、24日、25日、26日、29日)
- ・ 養老町巡回 (8日、18日、22日)
- ・ 大垣市親育ち講座 (11日)
- ・ 療育スタッフ研修会 (17日)
- ・ いびがわアソル研修会 (30日)
- ・ 成人相談 (大野、輪之内、池田 探斐川)
- ・ 5歳すこやか
- ・ 5歳医療 (15日)
- ・ その他 関ヶ原こども園、日新中 など

みと抽象的な語いの獲得、高学年以降では文章の読解や読み上げソフトなどの代替手段の活用を柱にしていく、そして自分のことを他の人に理解してもらうために自己開示し支援を要請できる力(セルフ・アドボカシー)を身につけられるような心理的な支援も必要であると石坂さんは述べています。

児童の指導にあたる先生方に対して石坂さんは、音読だけに注目するのではなく、目の前の児童生徒の将来像を見通しながら、寄り添い、共感しながら関わってほしいと記述しています。そして、本人が時間をかけて自分を受け入れ、自己理解し、自分の状態を正しく理解して周りに説明し、必要な時にヘルプが出せるようになるように支援していくことが大切なのだとも述べています。

自己理解とセルフ・アドボカシー(自己権利擁護)は、どの人にも言えることですね。